

自問未答

夜に液晶の光を見ない方がよいというのが、脳が日の光と誤認してしまうからというならば、私はこんな陰鬱な気分での光を浴びなくてはならないのだろうか。

明日もまた晴れらしい。夕飯の直前に見た面長の天気予報士が言っていた。

最近のテレビは見ていて味気ない、テレビを見ることが少なくなったから、何をやっているかもわからない何かになれた何者かが多く映るようになった。

今日の終わりがつまらないのはきつと、今日がつまらなかったからなのだと、ベッドからテレビを眺めて思った。

私は取り残されている気がする。

停滞というものは相対的に退化だ、それに気づいた私は休日というものが酷く怖くなった。

ある日その恐怖に耐えられず外に出て、自転車でいろんな場所を回った。

外は素晴らしいものだった。

鬱屈として雑多なこの部屋とは違う。

広く空気が澄んでいて、私の心まで開放的になる。

自然豊かな公園、地元のショッピングモール、思い返せば確かな春を謳歌した学校、まばらな思い出を歩き回った。

ただ、思い出に浸る心はやがて夏の暑さが溶かしてしまった。

結局持ち帰ったのは不快な疲労といつもより大きな虚無感であった。

予定のない散策を楽しめなくなったと知って、しばらく外に出ることをやめた。それと共に、外を直視することもやめた。

目の奥から視界が狭くなって、暗い部分ばかり見えるようになる。

それでも思考の中で、いついかなる時でも、一つだけ暗く光る感情があるのだ。
全てから解放されたい。

逃げ出す度胸も力もない、愚かなまま生き続ける図々しさもありがたいことになり。

この自縄自縛から抜け出す手段が常に脳の隅に潜んでいて、ここだと言って存在を主張するのだ。

死ねばいいだろ？

今まで積み重ねた全ての問いに回答しよう。

その前に進めない足を落とそう。

あっても使えない頭を割ろう。

いざ、矮小な一步を踏み外そう。

今までにないほどその感情が言葉をもって強く光った。

否、光ったのは視界の端からである。

遠い道路の先から強い光を放ちながら車がやってきた。

私は焦って後ろに転がるように降り、バランスを崩して座卓と衝突した。

座卓の上に置いてあった物体たちがバラバラと音を立てて床に落ちた。

音が止んで、しばらくしても私は啞然としていた。

頭の中ですっかり止まっていた問いが続く。

死ねばいいだろ？

転がり落ちた私は一つ、この狭い部屋の空気を吸って、ただ何も答えずそのまま吐いた。私の問い全てに、死が選択肢としてあるならば、死ねばいいと答えてそれで終わりだ。それは事実だ。

なぜ私は答えないのか？

どうして死なないんだ？

私は未だ答えない。

私はまだ諦められない、テレビの先に映ることが出来なくても、性根が腐っていて何かになることが出来なくても、答えない。

何故？

その問いには、今初めて、答えが出た。

物を確認するため、私はやっと電気をつけた。

目が眩んで思わず顔をしかめる。

手で視界を覆って徐々に目を慣らさせた。

意味はない、意味はない。

価値はない、

最後にべたつと、ベッドに這っているような形に落ち着く。

やっと息苦しくなってきたので体を起こす、あぐらをかいたのちに、また気力なく背中から倒れた。

時々、己の脳の部分がモヤかなにかに変性したように思える。

しわだらけのはずの半楕円が、その表面からモヤになって膨張し、頭蓋を押し出してくるような、あるいは真に大切な部分を圧していくような。

不快でないが決して愉快ではないし当然無でもない、いくら考えても正体のわからない何かが頭の中を埋め尽くしているのだ。

これはやっぱり良くない、もやがかかった部分を隅にぐっと押しやり立ち上がった。

右足をそこに、左足をこの辺りに、慣れた足取りで暗闇の中に立つ。

部屋の真ん中にはかつて座卓であった低い物置があるので、トイレに出る時などにはぶつけないよう周って行かなくてはならないし、その道中にも平積み紙束や雑誌に置いたネクタイや外行きの鞆などが置いてある。

暗闇の中でも足を踏めるのは、私が敷いた無秩序の中の小さな秩序だ。

一辺倒な景色の中、僅かに白色のついた場所があった。

白色は体を縮めたり伸ばしたりして存在を主張し、いつの間にか私はそれにつられて体が動いていた。

それは光を遮られた窓だ。

私はカーテンに手を掛ける。

開く意味はあるのか？

くだらない問いにすら一瞬怯んだが、振り切るように、カーテンの留め具を壊しそうなほど思いきり開いた。窓から外を見たのはいつぶりだっただろう。

宙に舞って照らされた埃を見て速やかに窓を開ける。眼前には大通りにつながる道とそれに沿って建ち点々と電気のついた住宅の数々がある。

少し目線を上げれば微かに見える星と月、目線を下げれば、いくつかの車とただのコンクリートが見える。眼鏡がなければろくに星も見えなくなった。

小さなころに見た星空は都合よく書き換えた記憶ではないかと思うほど、夜空の多くは黒一色である。だがやっぱり外は素敵だ。

この狭い部屋から少しでも抜け出したいと思って、軽く窓の縁を払い、慎重に腰掛けた。

私の穢れを全て洗い流すように、服の内側を風がさらい、私はしばらくその心地よさに浸っていた。

ああ、いつそのまま飛び出してしまおうか。

窓の縁に腰ではなく足をかけ、力の限り飛び上がるのだ。

風に全身を包ませ、地球の重力に従ってあの道路に着地しよう。

その痛みはきつと後悔するものだろうがしかし、治まるころにはニール・アームストロングと心を同じくするような偉大な一歩になるだろう！

狭い腰掛けに落ち着きながら、石の痛みと衝撃を、そして精神的な自由を夢想した。

足元が異様に寒気だっている。

コンクリートは黒く、だが夜空と反して街灯に照らされその存在を露わにしていた。

足を窓に掛けた時、また別の、本来あるべきではない感情が、私をまた飛翔へと誘う。

まただ、脳の表面にモヤがかかって、頭蓋の中がいつぱいになる。

明日もまた晴れらしい。

〽時の短いニュース番組がそう告げた。

だから何だというのだ。

嫌なニュースばかり目に止まるので、次の番組を待たずにテレビを消して、電気も暗くした。

鬱陶しい陽光を見ないためにカーテンで閉ざしたこの部屋には、電子機器の小さなランプが光るだけだ。

それでも部屋は暗闇だ、暗闇の中に不安と自己嫌悪の塊が現れる。

どうしてお前はそんなに何もできないんだと、私を正したがる私が、まるで誰かを叱るように言い続けている。

自分への他責思考とはなんと愚かなのだろうか、苦笑とともに嘲るのも、私だ。

「何にもなれないくせに」

私が言った、私は言葉を返すことができずに黙ってしまふ。

何者かになることを諦めたのもつい最近のことだ。

私の言う何かというのは、常に価値ある「何か」を指している。

心の底から自分を諦めきれず、いつかの私はその「何か」になって夢をかなえているし、今よりずっと利口な人間になるのだらうと、言葉として出さずとも思っていたのだ。

そうやって周りも見ないで生きながらえているうちに、私は私がまともな人間ですらないことに気づいたのだ。

誰も彼もがまともな人間か、そう思っているかと問えば、それは違うだらう。しかしそれに甘んじて、空想の阿呆と傷の舐め合いをした結果は語るに及ばない。

私は所詮私でしかない。

ほかの人とは違うという意味ではない、誰かにはなれない、私の本質は変えられないという意味だ。

慰めも優しさも全て、それがあれば出来る人間の特権だ、己の人生と立ち会った時、それに相応しい人生を送れてきただろうか。

お前にそんな価値があるか？

私はまた私を咎める。ずっと返答はできていない。

あるよ。と答えられる人間にはなりたくないのだ。

ないよ。とは答えられない、今こうして生きているのは誰かの優しさで成り立っているからだ。

所詮私は自分の矜持で、黙って、甘えているだけだ。

どうして黙るんだ？

なぜ苦しいフリをしているんだ？

なんで応えられないんだ？

それならばいっそ、見苦しくいるくらいならいっそ。

答えられない問いが積み重なっていく。

頭が鈍く重く感じて、ゆっくりと枕に顔をうずめた。

数度呼吸をして、そのまま少し暴れる。

枕を横に伸ばす、ちぎれもしないのに。

髪をかきむしる、痛くはない塩梅で。

布団を数重挟んで叫ぶ、届きも届かせもしない。

相変わらず汚くて狭い部屋だ。

傷が出来る程ではなかったらしいが、机の上にあった雑多な鑑賞物がいくつか床に転がっていた。それらをまた机の隅に置こうとして手を止める。

部屋の中を見渡すと手頃な棚があったので、そこに置いた。

棚の上も少し埃っぽい。

呆れたが、今掃除機をかけるのは面倒なので、手や足の裏を雑にはらって、そのまま眠ることにした。明日は晴れだったか。

窓を開けるにはいい天気だ。

